

# 観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



公益社団法人国際観光施設協会 副会長  
ホテル都市分科会 会長

野出木 貴夫

## はじめに

当協会内技術委員会のひとつであるホテル都市分科会では東京オリンピックを控えた2018年より新たな視点によるユニヴァーサルデザイン(UD)客室の研究を開始しました。発端は車いす利用者のためのバリアフリー(BF)客室が運営者からは“売れない部屋”として嫌われ、そのほとんどが法律の最低限の数に限られている実情でした。高齢者社会を迎え、車いす利用者の増加が見込まれる中、果たして法律の最低限のBF客室数で、今後の多様な観光需要にこたえられるのでしょうか？法を順守する中で、実質的に車いす利用者に快適で一方で健常者にも違和感のないBF客室を増やすアイデアはないものかと考えています。コロナ禍が明けて観光需要が戻りつつある中、再びBF客室のあり方について再考すべきかと思っています。

## e-WA プロジェクト

車いすの調査研究から始め、メカナムホイール(写真1)という特殊な車輪を装着した電動車いすに巡り合うことで新UD客室研究は加速しました。回転半径を小さくした上で、横移動や、座面の昇降が可能となることで、身障者の可動寸法を健常者に近づけることができ、一気に客室のデザインが豊かになることに気づきました。この新電動車いすに改善を重ね、2020年にかけて「e-WA(electric Wheel-chair Assistance)プロジェクト」を推進してきました。試作機を実際のホテルにも持ち込み実証実験を投稿した動画(QRコード1)で詳細を報告していますのでまずこちらを参照願います。また新UD客室研究ではこれに続き、2022年には客室ドアを引き戸で自動化する研究(QRコード2)を進め、2023年には客室内浴室の扉を防滴引き戸にする試み(QRコード3)にもチャレンジしています。これも併せてご覧ください。



写真1 メカナムホイール装着の新電動車いす試作2号機

## 準バリアフリー客室の提案

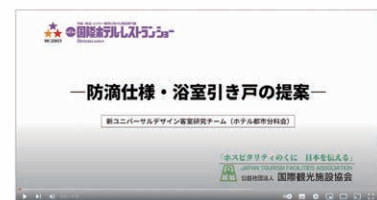
バリアフリー新法(BF新法)を順守することは前提で、車いす利用者、高齢者に優しく、一方で健常者にも快適で違和感なく利用でき、しかも運営者にも取り組みやすいBF客室をより多く提供しようというのがこの提案の主旨です。この提案は新電動車いすに施設内で乗り替えていただくのが前提ですが、使い慣れた車いすや特殊仕様の車いすから乗り換えは難しい場合もあるでしょう。ここではすべての方々に利用いただく



QRコード1  
e-WA プロジェクト 2020  
(5分24秒)



QRコード2  
客室ドア引き戸化と自動化  
(3分45秒)



QRコード3  
防滴仕様浴室引き戸の提案  
(4分14秒)



# 新ユニバーサルデザイン客室研究 ～準バリアフリー客室プロトタイプの提案～

公益社団法人国際観光施設協会 副会長  
ホテル都市分科会 会長

野出木 貴夫

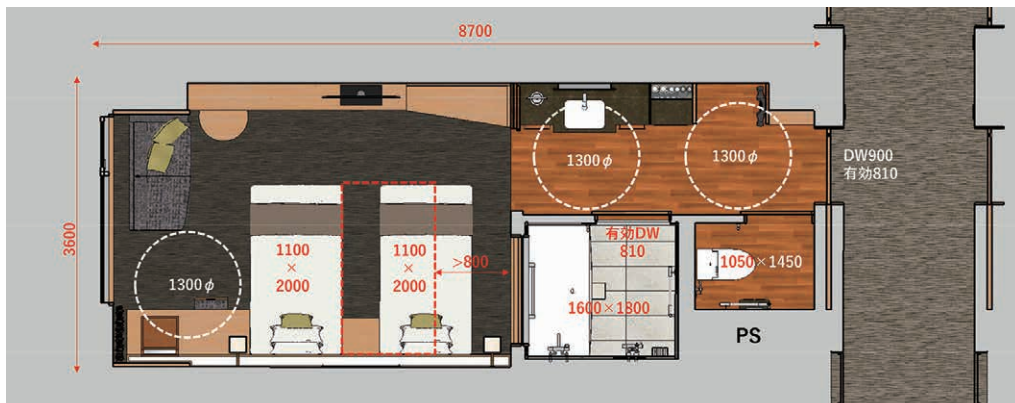


図1 プロトタイプ客室：約31㎡ツインルーム



QRコード4  
プロトタイプ客室  
一般客室として  
(3分19秒)



QRコード5  
プロトタイプ客室  
電動車いすの場合  
(5分41秒)

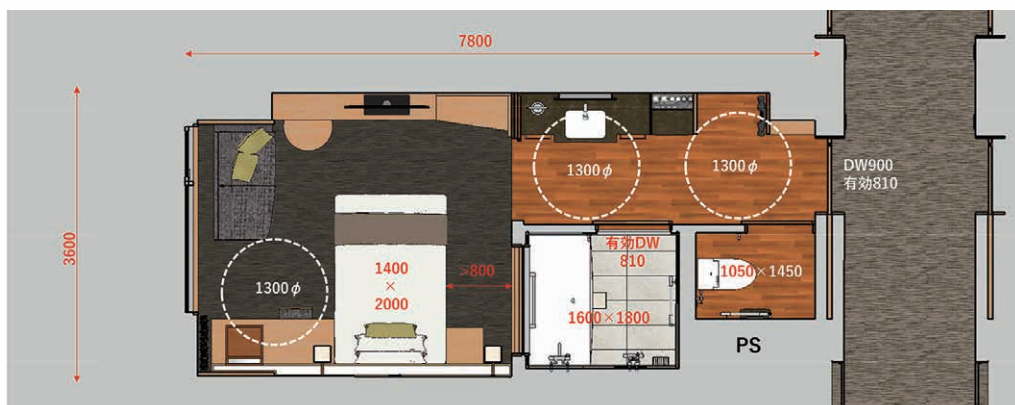


図2 プロトタイプ客室：約28㎡シングルルーム



QRコード6  
2024 セミナー  
(1時間22分)

ことまでは欲張らずに身障者・高齢者の何割かの乗り換え可能な方々へ快適な準BF客室をより多く提供できればと考えてみました。

これまでの新UD客室研究の成果を盛り込んだ客室平面を2024年のホテル展で発表しました。標準的なツインベッドルームとして間口3.6m、奥行き9m弱の31㎡を設定しています(図1)。発表に際しては立体的にご理解頂くためにCGによる動画2本を投稿しています。車いすを入れずに健常者の目線で見ていただく動画(QRコード4)と、新電動車いすを導入した場合の動画(QRコード5)です。それぞれ5分前後

の動画ですのでぜひご覧ください。健常者にとっても違和感のない客室が見て取れ、運営者にも“売れる部屋”としてご理解いただけるのではないかと思います。

なお2024年の1月に開催された東京都宿泊施設バリアフリー化促進セミナーではこれら動画を含めて詳細を解説しています。こちらは時間がある時にご覧ください(QRコード6)。このセミナーではシングルルームとして奥行きを約8m弱に狭めた28㎡タイプも同時に紹介しました(図2)。これらプロトタイプを参考に計画の中の新築案件または改修計画の参考としていただき、一部でも

採用検討いただければ幸いです。

## おわりに

この新電動車いすはホテル独自に所有するのは少しハードルが高く、リース業者より貸し出し、メンテナンスも面倒を見るシステムが好ましいと考えます。このサービスがビジネスとして軌道に乗るにはいろいろな課題があることも承知しています。このチャレンジのころざしをご理解いただき賛同される関係業界の皆様のご意見、ご指摘に加え、実現に向けての取り組み参加を期待しています。

連載

SERIES